



「地域とともにある学校づくり」と小中一貫教育の
実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 助川, 晃洋, 赤崎, 真由美, 坂元, 祐征, 中山, 迅, 竹内, 元, Akazaki, Mayumi, Sakamoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5028

「地域とともにある学校づくり」と小中一貫教育の実践

助川 晃洋*¹・赤崎 真由美*²・坂元 祐征*³・
中山 迅*⁴・竹内 元*⁴

“Creation of Schools That Coexist with Local Communities” and Combined Education Practices in Elementary and Junior High Schools

Akihiro SUKEGAWA, Mayumi AKAZAKI, Masayuki SAKAMOTO,
Hayashi NAKAYAMA and Gen TAKEUCHI

I はじめに

宮崎大学教育文化学部・大学院教育学研究科は、平成23年度に文部科学省から特別経費（プロジェクト分）としての予算措置（3ヶ年計画）を受けた事業「小中一貫教育支援プログラムの開発と実践－小中一貫教育に関する総合的研究とそれを基盤とする新人教員養成及び現職教員研修－」（通称「小中一貫教育支援研究プロジェクト」）の一環として、宮崎県教育委員会と宮崎県市町村教育委員会連合会に後援をいただいて、平成25年12月8日に、宮崎市民プラザ・オルブライトホールで、小中一貫教育フォーラム『「地域とともにある学校づくり」と小中一貫教育の実践』を主催した。プログラムの骨子は、次の通りである。

プロジェクト趣旨説明

基調提案：「地域とともにある学校づくり」と小中一貫教育のこれからの方向性

事例報告

事例報告を踏まえた協議：これからの義務教育学校の可能性・方向性をさぐる

全体総括

本稿は、このうちの「事例報告」にかかわって、その「報告資料」として、当日配布のパンフレットに掲載された五つの文章を再録したものである。Ⅱ－1とⅢ－1は、学校現場からの実践報告であり、Ⅱ－2とⅢ－2・3では、それぞれについて研究者が考察を加えている。

本稿のタイトルは、フォーラムのものをそのまま用いた。またパンフレットから本誌への転載に際しては、形式・表現上の調整をはじめとして、必要な軽い修正を随所に施した。ただし内容や論旨の変更は一切行っていない。

(助川 晃洋)

*¹ 宮崎大学教育文化学部

*² 宮崎市立広瀬小学校

*³ 都城市立笛水小中学校

*⁴ 宮崎大学大学院教育学研究科

II 中学校区を単位とする小・中連携の事例

1 宮崎市立広瀬小学校・広瀬中学校の実践

1-1 はじめに

広瀬小学校・広瀬中学校は、宮崎市内でも数少ない1中学校区に小学校1校が隣接しているという小中一貫教育を推進する上で大変恵まれた環境にある。学習面での児童生徒のよさは、素直で授業に臨む心構えができていて、児童生徒同士協力して学習に取り組むことができること、向上しようという意欲が見られること等が挙げられる。生徒指導面での児童生徒のよさは、明るく素直で、何事にも積極的に取り組む姿勢が見られること、9年間同じ小中学校で学ぶので、互いに仲がよく和やかで楽しい雰囲気があり、問題行動もほとんど見られないこと等が挙げられる。しかし学習面では、思考力・判断力・表現力の育成や望ましい学習態度・学習習慣の定着が小中学校ともに課題となっている。以下では、学力向上へ向けて小中一貫で取り組んできた内容と成果を報告する。

1-2 主題設定の理由

「知識基盤社会」の時代であるといわれる現在、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。特に、「生きる力」の知の側面と言われる「確かな学力」は「知識や技能はもちろんのこと、学ぶ意欲や自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたもの」のことであり、確実にそれらの資質や能力を児童生徒に身に付けさせることが重要である。そうした中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等をいわば車の両輪として相互に関連させながら伸ばしていくことが強く求められている。そして、これらは義務教育9年間を通して一貫して育成すべきものであり、学習指導面において小中学校で指導方針や指導方法の一貫性、指導の連続性が重要となっている。

そこで、平成23年度から研究主題を「『できた！分かった！学校が楽しい！』と言える児童生徒の育成」と掲げ、研究を進めることとした。平成24年度は、副題を「小中一貫による学力向上への取組を通して」と設定し、様々な成果と課題を得ることができた。3年目にあたる平成25年度は、この成果と課題をふまえ、広瀬小・中学校で目指す児童生徒像を「自分の考えをもつことができる児童生徒」「進んで他者と交流することができる児童生徒」「再思考し、次の行動（目標）につなぐことができる児童生徒」と設定し、望ましい学習態度や学習習慣の定着を図るとともに、問題解決的な学習や交流活動を工夫して、小中一貫による学力向上への取組をさらに推進したいと考えている。

1-3 研究の仮説

学力向上へ向けた小中一貫の取組を通して、望ましい学習態度や学習習慣の定着を図るとともに、問題解決的な学習や交流活動を工夫すれば、「できた！分かった！学校が楽しい！」と言える児童生徒を育成することができるであろう。

1-4 研究の基本的な考え方

① 研究主題「『できた！分かった！学校が楽しい！』と言える児童生徒の育成」について

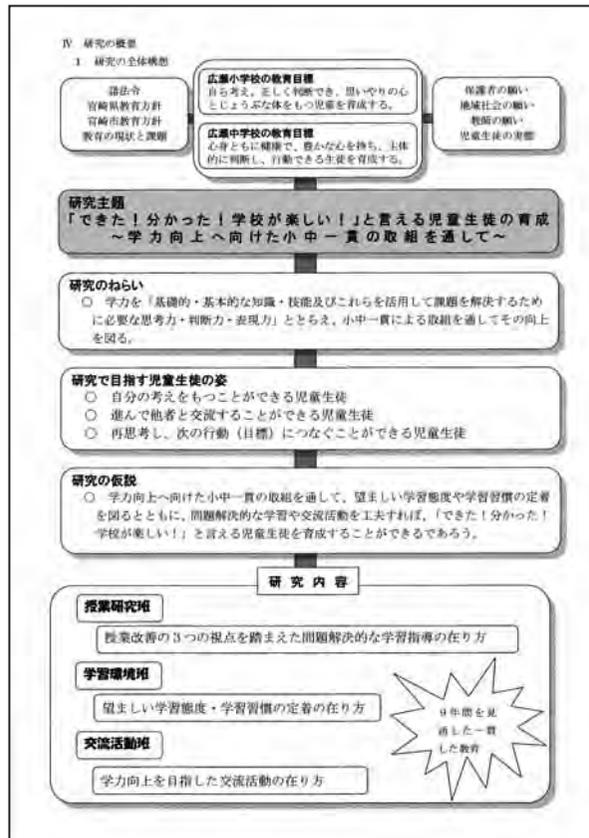
「できた！」・・・自分の思いや考えをもつことができる。
 「分かった！」・・・自分で考えたり、他者と交流したりする中で、自分の思いや考えを再思考できる。
 「学校が楽しい！」・・・児童生徒に「できた！」「分かった！」という思いがあふれ授業だけでなく学校生活が楽しいものと考えることができる。

② 副題「学力向上へ向けた小中一貫の取組を通して」について

広瀬小・中学校では、研究で目指す「学力」を、「基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」ととらえ、下記の児童生徒像を設定することにした。

③ 目指す児童生徒像について

- 自分の考えをもつことができる児童生徒
- 進んで他者と交流することができる児童生徒
- 再思考し、次の行動（目標）につなぐことができる児童生徒



児童生徒への意識付けも図ることをねらって、目指す児童生徒像を「ひ」「ろ」「せ」の頭文字を使って、表すことにした。

【3つの視点の標語】

こんな広っ子に!

○ **ひと** たよ じぶん いけん **に頼らず 自分の意見**

○ **いろ** こりゆう **んな人と交流し** 

○ **せ** ひろ **かい広げて 新た** あら **なわたし** 

1-5 研究の実際

1) 授業研究

① 問題解決的な学習について

9年間を見通した確かな学力の向上を目指した授業改善を考え、「問題解決的な学習指導過程を取り入れた授業づくり」に取り組むことにした。授業の中で「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する」ことを繰り返し児童生徒に経験させることによって、確かな学力が身に付くものとする。

② 「授業改善の3つの視点」について

「授業改善の3つの視点」

- 問題や課題を自分のこととしてとらえ、自分の考えをもつ。
- 自分の考えをもとにして、他者と交流をする。
- 自分の考えを再思考し、次の行動（目標）につなげる。

段階	学習活動	主な指導・援助
つかむ	1 教材とかかわりをもつ  <p>「楽しそうだな」 「おもしろそう」「なぜだろう」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を想起させる。 ・児童生徒一人一人の興味・関心、適切な考え方等を引き出す教材の提示を行う。 ・具体物の操作や直接体験なども取り入れ、疑問や課題意識を高める。 ・児童生徒の課題意識や願いが反映するような共通の学習課題を設定する。
	2 学習課題を設定する  <p>「こんなことを調べてみよう」</p>	
	3 解決していくための方法と結果を見通す  <p>「こんな方法で調べてみよう」 「たぶん、こうなるだろう」</p>	
考える	4 問題を解決する  <p>「やってみよう」 「作ってみよう」 「挑戦してみよう」 「測ってみよう」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人が考えたり、判断したり、試みたりする場や機会を設定する。 ・児童生徒一人一人の興味・関心、学習の仕方にあった多様な学習活動と学習形態を工夫する。 ・児童生徒相互の交流の場を設定する。 ・考えたことや調べたことを言葉や文章にまとめさせる。
	5 解決したことについて発表しあう  <p>「わかったぞ」「なるほど」 「やはりそうか」</p>	
振り返る・まとめる	6 本時の学習をふりかえる  <p>「よくできた」 「あんな方法もある」 「これでいいのだろうか」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価や相互評価を取り入れ、自分の学習の取り組み方、学習の仕方を振り返らせ、学習に対する成就感や満足感をもたせることで学び方の定着を図る。

2) 学習環境

○ 望ましい学習態度定着のための手立て

広瀬中学校では、以前から「学習の心得五か条」を活用して、生徒の学習態度定着を目指した取組をしてきている。平成23年度、小学校では中学校の「学習の心得五か条」を基に、児童の実態に合わせた「広っ子 学習のやくそく五ヶ条」を作成・掲示し、小中学校で学習訓練の統一を行ってきた。

ア) 学習の五か条全般の指導の手立て

学習の五か条の中から「今週の学習のめあて」を週ごとに設定し、朝の会の中で全員で唱える。学級で設定される「今日のめあて」とは別に「学習のめあて」を設定することで、基本的な学習態度を児童生徒も教師も意識することができる。教師は、授業中の児童生徒の態度や姿勢に気を配り、必要に応じて褒めたり指導したりする。また、帰りの会等で振り返りをさせ、児童生徒の様子を見届け、意欲付けを図っている。

イ) チャイム着席 徹底の手立て

全校が落ち着いた雰囲気の中で授業を開始するために、「小鳥のさえずり」の放送で静かに着席し、チャイムと同時に黙想をして静かに授業開始を待つようにした。児童生徒は、落ち着いた気持ちで授業に臨むことができる。さらに、教師もチャイムと同時に授業を始めることができる。

ウ) 姿勢への手立て

学習の五か条の中でも特に姿勢については課題がある。そこで、まず正しい姿勢のパネルを作成し、掲示することとした。教師は、授業中の児童生徒の姿勢に気を配り、パネル（姿勢図）を活用しながら必要に応じて褒めたり指導したりするようにした。小学校では、「ペタ ピン グー」の合言葉で、学習中の姿勢への意識付けを図っている。

3) 交流活動

○ 交流活動についての基本的な考え方

ア) 学力向上を目指した交流活動とは

次に挙げるA・Bのような双方向性の「交流活動」に取り組むことにより、スパイラルに学力向上を目指すことができると考えた。

A：すべての教科・領域等において、様々な形態の交流活動を推進することにより、学力向上に資する。

B：すべての教科・領域等で培った学力を実践に生かす場として交流活動（行事等）を行い、さらに生きて働く学力を育てる。

イ) 「交流」と「交流活動」について

「目指す児童生徒像」や「授業改善の3つの視点」及び「こんな広っ子に」の第2項にある「交流」とは、自分の考えをもった上で、いろいろな人の意見を聞いたり触れ合ったりすることにより、多様な考えがあることを知り、自分の考えとの相違点を確認し、再思考

につなげるようにすることを意味する。

「交流活動」とは、広瀬小・中学校の研究で目指す「学力」である「基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」の向上を目指して、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる活動を意味する。

ウ) 様々な「交流活動」の形態

- (ア) 教師間交流による授業や行事等の実施（交流活動A）
- (イ) 児童生徒間交流による授業や行事等の実施（交流活動B）
- (ウ) 地域や保護者も含めての交流による授業や交流活動の実施（交流活動C）
- (エ) 教師間交流による研修の実施（交流活動D）

エ) 交流活動の内容

(ア) 行事等で取り組む交流活動（ひろせウス）

ひろせウスでは、交流活動についての基本的な考え方を受けて、行事等で、様々な形態及び内容の交流活動を行うことにより、学力向上を目指すとともに、地域とのつながりを深め、地域を愛する子どもたちを育てることをねらいとしている。

「ひろせ」は、地域名の「広瀬」と、「こんな広っ子に」の「ひ」「ろ」「せ」の両方の意味がある。「ウス」は、「私たち」の意味の「us」である。私たちのふるさと「広瀬」をよりよくしていくために、自ら考え、共に行動できる児童生徒を育てていこうとするものである。

◎ あいさつ運動

中学校の生徒会が中心となり、小学生と中学生が、登校時間帯に「あいさつ運動」を行っている。地域の「見守り隊」の方々や企業の方々も、登校時の見守りを行ってくださっているので、地域ぐるみでの「あいさつ運動」が根付いていくことが期待される。



合同あいさつ運動

◎ リーダー研修

中学校の生徒会が中心となり、小学校5・6年生の代表と一緒に、「リーダー研修会」を行っている。内容は、広瀬小・中学校をよりよくしていくための意見交換を行う「広瀬小中サミット」、「啓次郎かるた」や「神代独楽」を使った「ふるさと名人大会」などである。両校の児童生徒が直接触れ合うことにより、相互理解を深めるとともに、広瀬地区や学校のために自分達に何ができるかを共に考える機会になっている。更に、このリーダー研修会の成果を、それぞれの児童会や生徒会の活動に生かしていくことができる。

◎ 小学校運動会での中学生による音楽演奏

小学校の秋季大運動会の開会式に、中学校の吹奏楽部が参加して、演奏を行っている。

中学生にとっては、母校の運動会に協力できる喜びがある。小学生にとっても、中学校進学への夢や憧れをもたせる機会にもなっている。

◎ 小中合同ボランティア（清掃活動）

広瀬中学校では、「広瀬小学校区地域づくり協議会」の協力を得て、地域の清掃活動を続けている。その活動に広瀬小学校も加わっている。小中学生が、地域の方々と一緒に地域の清掃活動に取り組むことにより、郷土への愛着を深め、住民の一人としての自覚や誇りをもつことのできるよい機会となっている。



小中合同ボランティア

行事等で取り組む交流活動（ひろせウス）

行事名	時期	交流活動の形態
あいさつ運動	年3回	A・B
合同避難訓練（地震・津波）	5月	A・B・C
リーダー研修会	8月	A・B
中学校サマースクール	8月	A
特別支援教育研修会（合同研修会）	8月	D
小学校運動会での中学生による音楽演奏	9月か10月	B
小学校陸上教室練習	10月	A・C
清掃活動及び清掃指導	11月	A・B
小中合同ボランティア（清掃活動）	12月	A・B・C

(イ) 教科・領域等で取り組む、地域素材を活用した交流授業（ひろせスタ）

交流活動についての基本的な考え方を受けて、教科・領域等の学習において、地域素材や地域の人材等を活用することにより、学力向上を目指すとともに、地域とのつながりを深め、地域を愛する子どもたちを育てる。

「スタ」は、「study」である。地域で学び、地域を学び、地域に学ぶことにより、「広瀬」をよりよくしていくために、自ら考え、共に行動できる児童生徒を育てていこうとするものである。

教科・領域等で取り組む、地域素材を活用した交流授業（ひろせスタ）

学年	教科・領域等	内容	時数	形態
小第1学年	生活	昔の遊び・神代独楽	8	C
第2学年	生活	いろは口説、広瀬音頭	2	C
	体育（表現）	ミルクムナリ	8	
	音楽	色々な音に親しもう・和楽器（打楽器を中心に）	2	C
	生活	かがやき太鼓	1	B・C
第3学年	総合的な学習の時間	佐土原っておもしろい	40	B・C
第4学年	総合的な学習の時間	美しい広瀬づくり	10	C
第5学年	総合的な学習の時間	島津啓次郎（6年生と一緒に調べて、かるた大会をする）	6	B・C
第6学年	総合的な学習の時間	島津啓次郎（5年生と一緒に調べて、かるた大会をする）	6	B・C
中第1学年	道徳	島津啓次郎（副読本）	1	D
第2学年	総合的な学習の時間	島津啓次郎（啓次郎かるた）	1	B
第3学年	総合的な学習の時間	島津啓次郎（講演会）	1	C

◎ 島津啓次郎についての学習

郷土の偉人「島津啓次郎」については、小学校5年生から中学校3年生までが、継続して学ぶ学習である。

広瀬中学校では「啓次郎の日」を定め、全学年で「島津啓次郎」について学んでいる。「広瀬小学校区地域づくり協議会」でも、「啓次郎かるた」を作成し、「啓次郎かるた大会」を開催している。

そこで、「ひろせスタ」でも、「島津啓次郎」を一つの大きな柱として、取り組んでいくことにした。

まず、小学校の5・6年生で、「啓次郎かるた」を使って、島津啓次郎について知る。導入では、郷土史に詳しい地域の方に講師をお願いして、講話を行う。さらに、学級ごとに「啓次郎かるた」の大会に向けた練習を行った。

(ウ) 合同研修会（平成24年度実施）

広瀬小中学校では、「確かな学力」を確実にそれらの資質や能力を見童生徒に身に付けさせるためには、義務教育9年間を通して一貫して育成すべきものと考え、学習指導面において小中学校で指導方針や指導方法の一貫性、指導の連続性が捉え、定期的に小中合同の研修会を行っている。

（平成24年度 実施）

月	日	形 態		研 究 計 画 と 研 究 内 容
		小学校	中学校	
4	18	小中合同研①		今年度の合同研修について
5	9	小中合同研②		班の研究内容の推進
6	6	小中合同研③		※中学校の学校訪問（中学校授業研究会）→小学校参加
	20	小中合同研④		学校訪問の反省と指導案検討②
7	30	小中合同研⑤		共通理解事項の確認と班の研究内容の推進
8	23	小中合同研⑥		研究紀要原稿の作成についての提案
10	31	小中合同研⑦		研究公開当日の確認及び準備
11	21	小中合同研⑧		※研究公開
12	25	小中合同研⑨		次年度の方向性についての検討と共通理解
2	13	小中合同研⑩		次年度の方向性についての検討と共通理解

1-6 成果と課題

1) 研究の成果

- 授業改善の3つの視点を意識した授業づくりができたことで考えさせる場面を設定できた。
- 授業前の黙想や五カ条など学習環境に関して小中で連携できたことで、中学校入学における新入生の不安の軽減や保護者の理解を高めるうえで、大きな成果があった。
- 小学校と連携することで、小中の協議があり、小中の「文化」の違いを知ることができた。それを理解した上で、小中それぞれの役割や指導の仕方考えることができたのが成果だと思う。
- 小学校との距離が近くなり、気軽に情報交換が行えるようになった。そのため、生徒理解が深まったと思う。

2) 研究の課題

- 小中につながっていくもの、発表の仕方、話合いの仕方、行事の企画・運営等、将来に向かって必要となるべきことを確実に学ばせていく（身に付けさせる）ことを課題とすべきではないか。
- 研究を継続的に行っていくことが必要である。

(赤崎 真由美)

2 連携型小中一貫教育実践のカリキュラムマネジメント

—「つながり」の理念とその具現化—

2-1 カリキュラムマネジメントの要点としての「つながり」

カリキュラムマネジメントとは、各学校において、教育目標をよりよく達成するために、カリキュラム、すなわち教育計画及び日々の授業とそれらの評価・改善のプロセスを中核として行う学校づくりであり、学校改善である。その基軸となるのが、平たく言えば、「つながり」である。例えば、いかに教育活動の「つながり」をつくるか、いかに人と人との「つながり」をつくるか、いかに学校と地域との「つながり」をつくるか、である。

2-2 宮崎市広瀬中学校区の小中一貫教育実践における「つながり」の実際

広瀬中学校区（市立広瀬小・中学校）では、児童・生徒の学力向上をめざして、小・中学校が共通して、或いは連携して、次の三つに取り組んでいる。

- (1) 学習規律の徹底：「広っ子 学習のやくそく五ヶ条」（小）と「学習の心得五か条」（中）に基づく望ましい学習態度（チャイム着席、黙想、正しい姿勢）の定着
- (2) 授業の研究・改善：「基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」を育成するための「問題解決的な学習指導過程（つかむ→考える→深めあう→広げる・まとめる）を取り入れた授業づくり」
- (3) 交流活動（「ひろせウス」、「ひろせスタ」）の実施：「他者、社会、自然・環境」とのかかわりによる「生きて働く学力」の育成

広瀬中学校区では、(1)を基盤として(2)が行われ、さらに(2)の成果を踏まえて(3)が行われている。また隣接、1小1中校区という条件を生かして、授業や研修での教師間交流や行事等での児童・生徒間交流を積極的に行うとともに、保護者の協力を得て、地域学習を行っている。すなわち教育目標・内容・方法の「つながり」（カリキュラム研究者の語法に従えば、「連関性」と関係者の「つながり」（同じく「協働性」）が実現している。このことから、広瀬中学校区の小中一貫教育実践は、1で述べた理念的な規定が、そのまま体现されたような取り組みであるとみなし得る。

2-3 中学校区を単位とした学校文化の形成と小中一貫教育実践の創造

広瀬中学校区では、小中一貫教育の「成果」と「課題」がしっかりと把握されている。そこには、成果を喜びつつも、立ち止まることなく、「次の一手」を考え続ける姿勢がある。課題解決を志向し、教育活動の改善を繰り返す。こうした動的な組織であることは、自律的な学校経営（local school management）が求められる今日において、何より重要である。その結果と

して、広瀬中学校区ならではの学校文化（広狭両義の組織文化、カリキュラム文化、児童・生徒文化、校風文化等の総体）＝判断と行動の基準が生まれ、児童・生徒と地域の実態に即した小中一貫教育実践が創造されることになるだろう。

参考文献

金子郁容・鈴木寛・渋谷恭子 『コミュニティ・スクール構想 学校を変革するために』 岩波書店 2000（平成12）年

村川雅弘・田村知子・東村山市立大岱小学校編著 『学びを起こす授業改革 困難校をトップ校へ導いた“大岱システム”の奇跡』 ぎょうせい 2011（平成23）年

（助川 晃洋）

Ⅲ 地域と基盤とする施設一体型小中学校の事例

1 都城市立笛水小中学校の実践

1-1 はじめに

平成22年度より都城市初の小中一貫校として開校した本校は、地域をあげてふるさと笛水の活性化に取り組んでいるところである。そこには、地域住民の並々ならぬ、郷土への思いがある。このような恵まれた環境の中、本校は、平成23年度より都城市教育委員会指定研究学校として、本校の特色である地域との連携や小中一貫教育を生かした「ふるさと教育」をテーマに研究を行ってきた。

ふるさとを知り、ふるさとに触れ、ふるさととのかかわりを深める中で、地域の方の思いや願いに気づき、地域の一員として地域への貢献を考え、行動する児童生徒が育ちつつある。以下では、ふるさと教育を中心に、これまでの取り組みと成果について報告する。

1-2 主題設定の理由

本校が「ふるさと教育」を推進するに当たってキーワードにしたのは「ほこり」である。ふるさと笛水にほこりをもつ、自分自身にほこりをもつ、小中一貫9年間の教育活動で得た「ほこり」を胸に、将来広く大きなステージで活躍できる「ひと」に育ってほしいと願っている。

しかし、児童生徒の実態を見ると、素直で礼儀正しい反面、「ふるさとのよさが具体的に言えない」「主体性が育っていない」「思考力や表現力が弱い」という3点が、特に指摘された。

そこで、本校の特長を生かして、2つの視点からアプローチすることとした。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 笛水のよさを生かした教育活動 ○ 小中一貫教育による教育活動 |
|---|

1-3 本校の考える「ふるさと教育」

本校では、ふるさと教育を次図のように、「ふるさとの力を活用した教育」と捉えた。具体的には、地域の『ひと・もの・こと』といった地域の財、地域の教育力を活用し、「ふるさととのかかわりを通して、ふるさとにほこりを持ち、心豊かでたくましい児童生徒の育成」を図っていくことをねらいとしている。

ふるさと教育推進に当たって、まず、地域と学校の思いを集約し、学校・家庭・地域が一体となって育てていく子ども像を地域全体に広めていった。

次に、ふるさと教育推進協議会を立ち上げ、学校、保護者、地域の方が一堂に会し、それぞれの思いや願いを交流しながら、目指す子ども像に近付けていくための教育改善を図っていった。

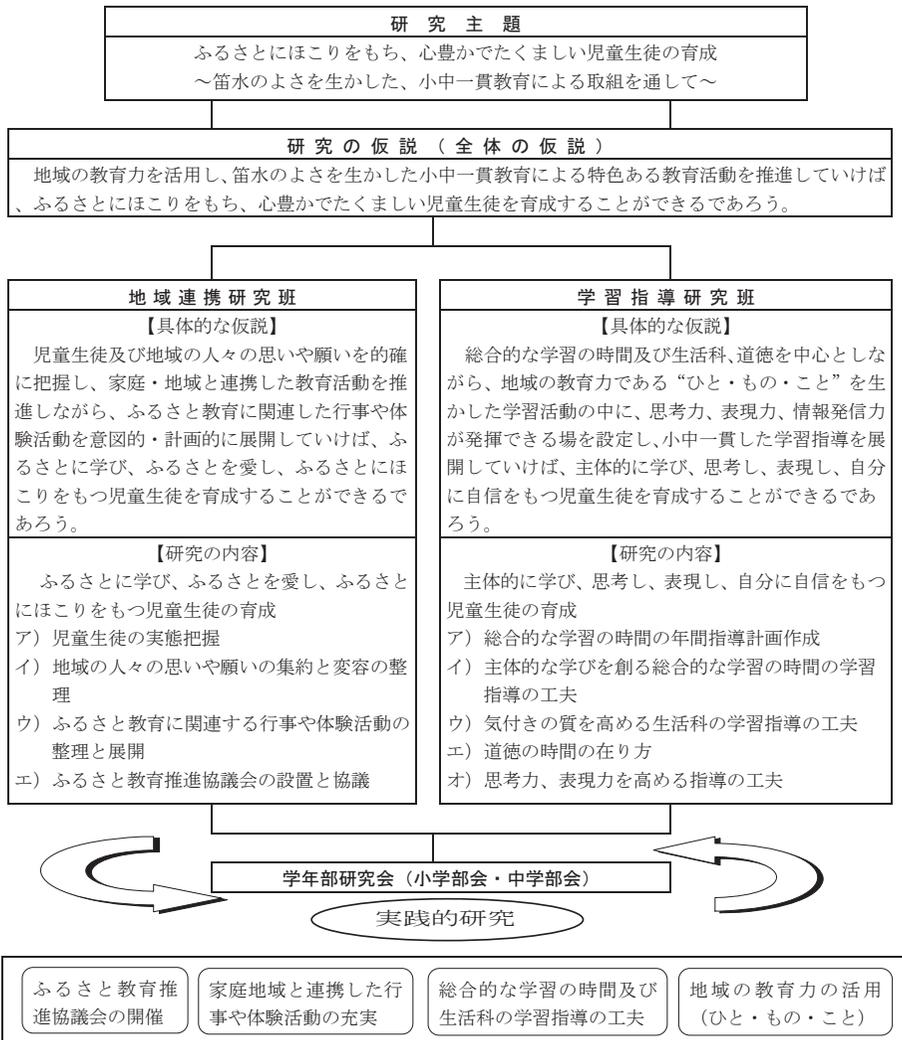


1-4 目指す子ども像

本校の「ふるさと教育」で目指す子ども像

ふるさとにほこりをもつ	自分に自信をもつ	主体性をもつ
○ ふるさとに学び、ふるさを愛し、ふるさとにほこりをもつ子ども	○ 自分の考えを深め、適切に表現し、自分に自信をもつ子ども	○ 行事や体験活動に主体的にかかわり、発信できる子ども
小 ふるさとの人に感謝し、ふるさとの自慢ができる子ども 中 ふるさとのよさを再発見しようとする子ども	小 自分の考えを堂々と発表できる子ども 中 自分に自信をもち、積極的に表現・発信しようとする子ども	小 自ら進んで活動できる子ども 中 創意工夫しながら行事や体験活動に取り組もうとする子ども

1-5 仮説及び研究内容

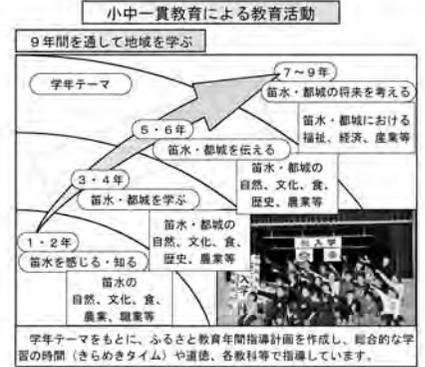


1-6 ふるさと教育の実際

笛水地区で行われる行事や体験活動を、学校主体と地域主体に分類して整理し、さらに主体的に参加するものを精選し、立案・計画していくことにした。地域の一大行事である笛水夏祭りに対しては、小学部は子ども御輿を出したり、チラシをあらゆる店舗に貼ってもらったりし、中学部は子どもプロジェクトを立ち上げ、屋台を出して、その収益を東日本大震災で被災した田人中学校（福島県いわき市）へ贈る活動を行った。自分たちで地域のために何かできないかを考え、主体的に活動する姿が見られた。

また、学習指導においては、総合的な学習の時間及び生活科を中心に、学習過程を「つかむ・調べる・深める・まとめる」の4段階で構成し、小中一貫した学習指導の充実を図ってきた。思考力を高めるために、特に重視したのが「つかむ」段階と「深める」段階である。つかむ段階では、単元を貫く課題を設定する。そのために、3・4年生では体験活動から、5・6年生ではウェビングを通して、中学部では2つの対象を比較することで、それぞれの発達の段階に合わせて思考させていった。また、情報収集活動を見通しをもって行えるように、小中共通のワークシートを活用し、常に目的、内容、方法を考えさせ、自己評価できるよう工夫した。また、深める段階では、整理・分析する手法を「今、求められる力を高める総合的な学習の時間

笛水のよさを生かした教育活動	
家庭・地域と連携して行う行事や活動	学校主体行事
4月 新歓会	入学式
5月 笛水ウォーク びま祭り	みどりの少年団開成式 華北作業 元氣花壇整備
6月 子供会行事 ダム湖清掃 田圃文 地やが中講習会	ふれあい会 ヤングジョブ体験 夏祭り
7月 電祭り	そば屋まき
8月 キッズボート大会 （前泊体験）	笛水大運動会 文化祭 そば祭り 元氣花壇整備
9月 子供会行事 敬老会 十五夜 笛水大運動会 稲刈り	文化祭 そば祭り 元氣花壇整備
10月 稲刈り	文化祭 そば祭り 元氣花壇整備
11月 板校	文化祭 そば祭り 元氣花壇整備
12月 餅つき	文化祭 そば祭り 元氣花壇整備
2月 餅つき	文化祭 そば祭り 元氣花壇整備



地域の素材や人材が豊富

ゲストティーチャー H24・普段の授業で12名のご協力です

地域へ出かけ直接聞きました

地域へ出かけ見たり体験したりして学びました

十柱神社へ 農業体験へ かやぶきの里へ

笛水は、家庭・地域と一体となった豊かな活動や行事がたくさんあります。いつかたてさんの方のご協力、ありがとうございます。夏祭りの授業でも、地域の方に学校へ来ていただいたり、子どもたちが地域へ出かけたりしてふるさと教育を進めてきました。これからも、ともに充実させていきたいと思います。

思考力、判断力、表現力を高める指導

よく考えさせる授業づくりに努めました

笛水のよさは？ 夏祭りでできることは？ 関連のある文化財は？

分かりやすく表現しました

地図にまとめて発表 笛水のことを劇にして楽しく発表 ポスター発表

ふるさとの素材の研究・発表を行いました

かやぶきの里調べ 火力・風力発電の研究

ふるさとの人材・素材をもとに、小中一貫校としてのメリットや少人数のメリットを生かし、子どもがよく考える授業づくりに努めています。

また、子どもが自ら企画して、みどりの里や田舎に出陣したり、子どもたちの手作りポスター等の発信をしたりしてきました。これからも、ふるさと教育の新たな表現・発信をしていきます。

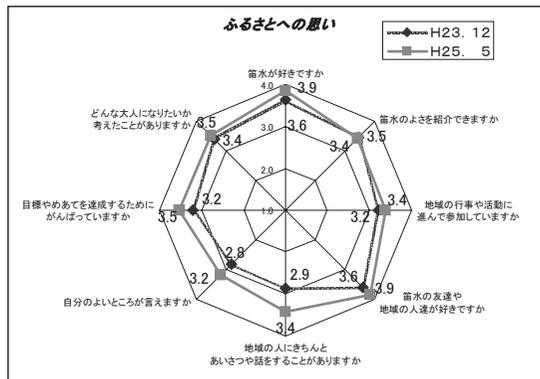
の展開」を参考に、絵カードやマップ、SWOT分析など、発達の段階や単元の特質に応じて選択していった。

1-7 ふるさと教育の成果

子どもの「ふるさとに対する思い」(平成23年8月と平成25年5月に実施)

4段階評価の結果では、ほとんどの項目で数値が向上した。

記述式の設問では、記述内容に広がりが出てきて、より具体的な回答が得られた。



「笛水のどんなところが好きですか。」

人が優しい 人が優しくおもしろい
団結力がある 協力している
笑顔が優しい
人が親切で、悪いところは叱ってくれる
他の地域に負けずにがんばっている
 自然が多い みどりが多い 空気がきれい

「笛水のよいところを教えてください。」

人が優しい 協力している 自然が豊か
笛水星流太鼓がある 星がきれい
お地蔵様がある 山菜が採れる
 行事が多い いろいろな知恵を学べる

(__は平成25年度に新たに出てきた内容)

ふるさと教育推進協議会の方から (平成25年度実施)

○ 地域のために

地域のために何ができるかを自分から発言する姿が見られるようになりました。

○ たくましさ

夏祭りでは、自分たちからマスメディアにPRしました。大人でもためらう活動を自ら企画する姿にたくましさを感じます。

○ 「私たちのためにありがとう」

この言葉が自然とできるようになりました。作った言葉ではなく、普段からの素直な声として響いています。

○ 「大変」から「楽しかった」へ

取組が前向きになりました。活性化委員会の取組(親の姿)を見てくれていることがうれいです。

○ 自分のこととして

毎年繰り返される行事に対して、マンネリではなく、知っているが故に自分からかわろうとする姿が見られるようになりました。

○ みんなに出番

笛水の子どもは、各個人の出番があります。本当に恵まれていると感じます。また、それに何とか応えようとする子どもの姿が魅力的です。

○ 子どもがきてくれた！うれしい！

私は、地域に住む者です。子どもは随分前に卒業しました。そんな中、笛水の子どもが話しかけてくれるようになり、本当に嬉しく思っています。

○ 自分がリーダーに

学年が上がるにつれ、いろいろな仕事を覚え、下に教えようとしています。「自分がリーダーにならなければ」の意識が見られるようになりました。

○ 笛水を誇りに

たくさんの方の活動の様子を見て、ふるさとのよさを誇りに思う姿が、感じ取られるようになりました。

1-8 おわりに

「ふるさと教育」という本校にとっての新たなテーマに対して、試行錯誤しながら、日々研究に取り組んできたが、研究を深めれば深めるほど新たな課題が生まれ、研究には終わりが無いことを強く感じている。今後も、保護者や地域、そして子どもの期待に添える研究を推進していきたいと思う。

(坂元 祐征)

2 小中一貫教育で育む笛水小中学校の児童・生徒の科学的探究の力

理科学習が児童・生徒の将来にとって有益であるためには、科学的知識と同時に、それらを活用して行う科学的な探究能力の育成、物事に対して科学的に思考し判断しようとする態度の醸成が大切である。このような意味で、科学の自由研究が従来から奨励されている。

小中一貫校の都市市立笛水小中学校は、近年、科学の自由研究で著しい成果を上げている。宮崎県教育委員会と宮崎大学が連携して毎年実施する「科学夢チャレンジ事業・サイエンスコンクール」には、表1のように小中学校で多数の応募があった。この中から、県内8地区の審査と中央審査を経て、各校種で4件が宮崎大学でのプレゼンテーション審査に進出する。笛水小中学校は、平成24年度と平成25年度に、以下

表1 応募総数

	小学校	中学校	高等学校
平成24年度	14,021	12,639	12
平成25年度	12,961	13,306	13

平成24年度	小学校	火力発電と水力発電 ～歯車をより多く回転させるのはどっち～
	中学校	かやぶき屋根の家は快適なのか ～かやぶき構造の快適さを証明したい～
平成25年度	小学校	ヒヨコの行動をコントロールしたい ～ヒヨコの五感を徹底検証～
	中学校	ミドリムシの走光性 ～ミドリムシを増殖させて九州を描きたい～



写真1 小学生のプレゼンテーション



写真2 中学生のプレゼンテーション

笛水小中学校が、サイエンスコンクールの強豪校になった背景には、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で中高一貫教育に取り組んだ経験を持つ理科担当の大峰隆史教諭を中心とした、地域の協力を得ながら行われる連携指導がある。笛水小学校の理科授業では、まず年度当初の4月に教室に掲示が行われて、テーマ探しが始まる。そのテーマ探しでは、地元の自然や施設に目が向けられることが多く、水力発電所、かやぶき屋根の家、養鶏場、野尻湖といった地域の自然や施設が、それぞれ、火力発電と水力発電の比較、かやぶき屋根の快適性の証明、ヒヨコの行動のコントロール、ミドリムシの走光性などへの着眼につながっている。この学校では、1年間を通して科学的な疑問の発掘や、探究的思考が促され、それが小中学校で途切れなく進化・発展する。

ここには、小学生が中学生の研究から学び、中学生は小学生に分かるような説明を試みるといった科学の文化がある。このような研究的風土が、小中学校の学年進行に応じて探究能力を高める素地となる。笛水の実践は、小中一貫の特性を良い方向に生かしている好例といえる。

(中山 迅)

3 小中一貫教育を支える笛水小中学校の授業づくり

小中一貫校の都城市立笛水小中学校には、任用替え教員の活用と兼務教諭による小中交流授業を推進することを通して、小学校における4教科の複式指導の解消が実現している。小中交流授業を推進するために、校時程の工夫もなされている。笛水小中学校では、小中教員の交流授業が、ただ単に複式授業を学年別授業に解消するというだけでなく、指導方法の工夫を促進する取り組みとして働いている。確かに、授業を受けている子どもの人数は少ない。でも、個に寄り添う指導が、単なる個別対応にとどまらず、教材づくりや授業づくりに反映されているのは、どうしてだろうか。一人ひとりの子どもが見えれば見えるほど、教材研究に取り組むとはどういうことだろうか。

一つには、笛水小中学校の授業では、「わからない」という発言も含めて、子どもたちが自らの理解状況や関心をよく表明している。授業の内容や進行に子どもの意見表明がある。私が参観した英語の授業では、「わかった!」「わかんない」「ああ、ああ」という子どもの理解のありようが口癖のように聞こえていたし、「これ一つずつですよ」と、示された教材の意味と学習方法を子どもが教師に確認する場面もあった。また、「あなたにとって重要なことは何ですか」と子どもたちに尋ねたとき、一人の子どもは“Family”と即答したが、もう一人の子どもは考え込んでしまっていた。しかし、教師は、「早く」と急かすこともなく、正解はあなたの中にしかなないとでも言うかのように、自分の言葉で答えることを期待して待っている。言葉が生まれる時間と何よりも子ども自身の存在が大切にされていた。理科の授業では、意見を言おうとする子どもが少し答えに詰まっても、「だいじょうぶだと思う。ちょっと待ってください」と教師に自分をさらけ出していた。また、二酸化炭素が水に溶けるかを問うたとき、ペットボトルを振るような動作をして試行錯誤し始めた子どもに教師は発言を求めていた。「手を挙げている」という見える意志表示からではなく、「問題に取り組みはじめた」という見えない教材への子どもの関心に、教師が応答しているのである。

二つには、笛水小中学校の授業では、子どもが教材に集中して取り組んでいた。たとえば、英語の授業では、This car is popular. という文とIt runs very fast.という文を関係代名詞でつな

げようとしたとき、子どもたちは「この車はとても速く走ることで有名です」と混乱し、教師も子ども理解のあり方に少し戸惑っていたかのように見えた。しかし、教師は言葉で説明を再度試みようとするのではなく、子どもと教材を見比べると、関係代名詞でつないだ英文を黒板に書き足して、その英文から再度子どもたちに考えさせていた。子どもの間違っただけを正そうと説明するのではなく、教材に戻して子どもに考えさせていたのである。理科の授業では、子どもが宅習で調べてきた用語を彼がどこで調べてきたかに戻って子どもたち全員と共有していた。笛水小中学校では、授業を構成する主体に、子どもが位置づいている。どういう授業をつくるか、授業の構成に子どもの意見表明がある。

笛水小中学校では、教材研究が、教材そのものの研究にとどまらず、子どもと教材の関係をとらえようとしている。子どもの個に寄り添う指導が、教材をもとに子どもとともに探究しようとする指導観に支えられている。子どもが授業づくりに参加している点が、笛水小中学校の小中一貫教育を支えていると思えた。

(竹内 元)